の みが わ

２００５年　６月　３日　発行
通算　第３７号

連絡先　　郵便番号　146-0085
大田区久が原４－１９－２４
発行　　大坪　庄吾方
呑川の会　メール　s.ootubo@nifty.com
会 HP　　http://homepage3.nifty.com/nomi/
高橋会員 HP　http://homepage2.nifty.com/aoiyume/

総会 兼 魚勉強会 の開催のご案内

次のとおり平成 17 年度の総会を下記のとおり開催したいと思いますので、ご多忙とは存じますが、ご出席ください。そして総会に先立ち魚勉強会を実施いたします。
呑川をもっと魚等の生き物豊かな川にすることは呑川の重要な課題の一つです。また講師の中瀬さんは大森ふるさとの浜辺公園の人工海浜・干潟で実際の生き物回復事業の携わっておられていますので、興味深い勉強会になると思います。ご期待ください。

１．開催日時　　6 月 25 日（土）13 時 30 分から 17 時 30 分予定
２．場　　所　　蒲田小学校　2 階会議室
３．魚勉強会
　講師　　五洋建設　中瀬　浩太　さん
　テーマ　　都市河川の魚類の分布と生態
　時間　　13 時 30 分から 15 時 30 分を予定
４．総　　会
　議　題　①　平成 16 年度活動報告
　　②　平成 17 年度活動計画の検討
　　③　平成 17 年度世話人の選出
　　④　呑川親子ウォーク等懸案行事等の検討
　　⑤　その他

魚勉強会は呑川の生き物に関心をお持ちの方は会員以外でも是非ご参加ください。

地下鉄構内からの地下水活用について調査の報告

大坪庄吾

池上梅園への湧水導入については昨年から工事も始まり、すでに終了したとの話しを聞いていたので関係する所に伺って取材した。4 月７日に東京都交通局馬込保線管理所に行

き、担当の庄司俊一さんと連絡を取ったが所用のためその日の午後電話により聞き取り取材ができた。その後４月 21 日、大田区北地域行政センター平和島公園管理事務所、池田利明さんと遠藤彰さん、大田区まちづくり推進部の明立周二さんほかとお会いしてお話を伺った。　取材したことをまとめると次のようになる。

湧水工事までの経過

地下鉄構内から湧き出す地下水の排水については、すでに目黒川、隅田川、古川への排水が実施されている。西馬込保線管理所管内での排水については、中延をへて目黒川に流すことが予定されていたが、費用等の関係、大田区からの申し入れもあって大田区への排水が検討された。

2003 年から始まった協議がまとまり、2004 年には具体化され、交通局から池上梅園を経て、呑川への排水路を作ることになった。

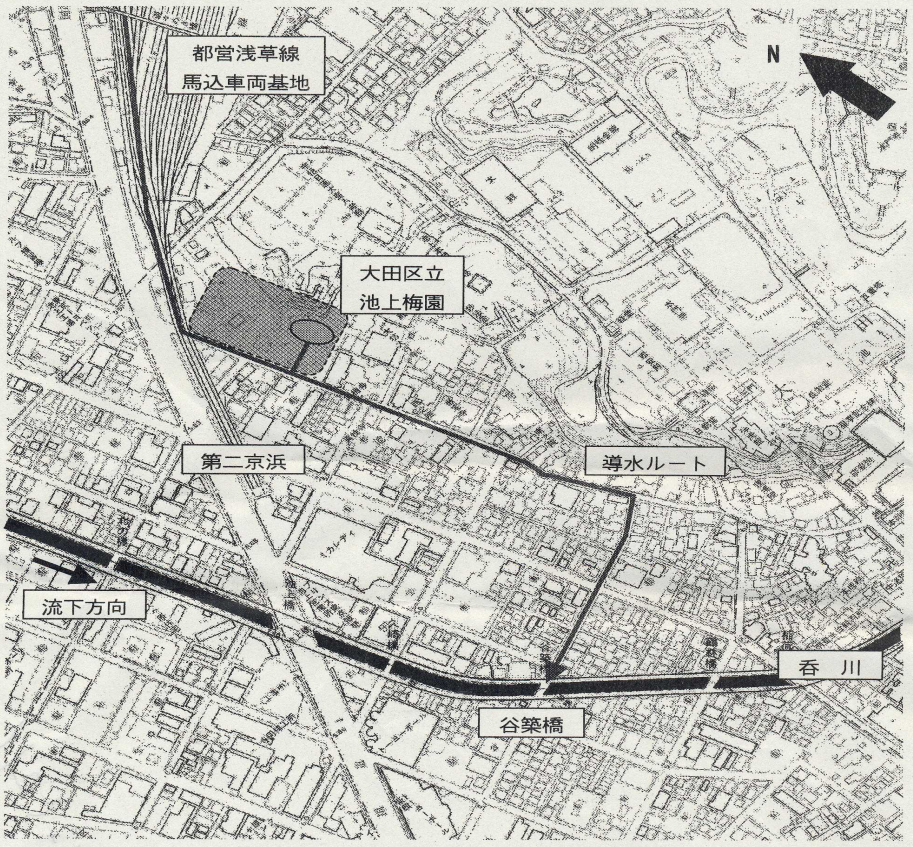

図１　馬込車両基地地下水の呑川への導水位置図
（着色部は概ねの位置を示しています。）

2004 年 10 月から工事が始まり、2005 年３月には通水試験が行われた。

2005 年１月、東京都建設局、東京都交通局、大田区の３者により、湧水活用についての「基本協定」が結ばれた。交通局の排水施設から池上梅園前まで通水し、一部を梅園内の池の浄化に使い、戻った水も一緒にして歩道地下の導水管で呑川の谷築橋のところで呑川に放流する。まだ下水道局による水質検査などの未処理のことが残っていて、2005 年６月ないし７月ごろから通水が開始される予定とのことである。

通水工事の管理は大田区部分については大田北行政センター、平和島公園管理事務所が担当する。通水量は年間５万トンの計画になっている。降雨などによる呑川の水位の状況を見て排水を止めたり出したりする設備が設けられていて調節することが協定で決められた。水量の目安は一秒あたりおよそ一升瓶一本程度かなとのことである。

通水の仕組み

東京都交通局馬込管内に馬込A、B、馬込１丁目ポンプ場があり地下鉄構内の湧水が集まってくる。

たまった水を３時間に一回程度、導水管に圧力をかけて送り出す(圧送)。この水が池上梅園前に導かれる。そのうち１割ないし２割が分水され、梅園内の池に入れられて池を浄化する。戻った水を一緒にして呑川に導くようになっている。大雨のさいには通水を止める。

大坪のコメント

「呑川へ湧水を」と日頃から望んでいた願いが一部でもこのような形で実現することはたいへん嬉しいことである。　もっと上流部からの導入があればよいとは思うが、今回は自然の湧水が下流部にまず実現した。さらに上流部に何らかの形で湧水の流入があることを将来の課題としたい。それには台地下の湧水源の復活などやれば出来ることもあるのではないだろうか。

呑　川　の　ゴ　ミ

平成 16 年度の呑川でのゴミ回収量（＝発生量）がまとまり区まちづくり課から連絡がありました。従来は回収作業を実施している各土木事務所に問い合わせて把握していたものですが、16 年度分から区のまちづくり課で全体を把握して欲しいと要望したところ実現したものです。呑川のゴミ減量についてまちづくり課で実施できることは非常に限られているとは思いますが、まず現状を把握することが大事でしょう。また太平橋から下流側は風による東京湾から入りこんだものも含まれ、厳密に呑川で発生したものには限りません。ちなみに双流橋、馬引橋、菖蒲橋での回収量は 16 年度は　36.615 ㎥ですが 15 年度、14 年度はそれぞれ 27.055 ㎥、29.77 ㎥です。

平成 16 年度　呑川河川浮遊物清掃実績一覧(月別)

単位㎥

		双流橋付近	馬引橋付近	菖蒲橋付近	太平橋～夫婦橋	夫婦橋～呑川河口	計
平成 16 年	4 月	0.75	1.040	0.500		0.630	2.920
	5 月	0.75	1.125	0.500		0.980	3.355
	6 月	1.00	4.050	5.050	4.80	0.500	15.400
	7 月	1.25	6.300	1.300	6.30	1.780	16.930
	8 月	0.75	1.000	0.250		1.520	3.520
	9 月	1.00	1.125	0.500		1.100	3.725
	10 月	0.75	0.500	0.500		1.260	3.010
	11 月	0.75	1.500	0.250		1.176	3.676
	12 月	0.50	0.750	0.500		1.812	3.562

平成 17 年	1 月	0.25	0.250	0.500		0.588	1.588
	2 月	-	-	-		0.900	0.900
	3 月	0.50	0.500	0.375		1.665	3.040
合計		8.25	18.140	10.225	11.10	13.911	61.626

矢川お花見ウォーク

菱沼　公平

4 月 3 日（日）、前日までの天気予報では、「曇後雨」というもので、気温も低いとの予報が出されていました。しかし当日は予想に反して、雨どころか日もさすなど、途中でセーターなどを一枚ぬぐほどの暖かさになりました。

ところが今年の東京は寒い日が多く、桜の開花が遅れ残念ながらお花見にはなりませんでした。ＪＲ南武線谷保駅に集合して、谷保天満宮から約 6 キロに及ぶ清流の散歩道を歩きました。

武蔵野の大地にはぐくまれた湧水による小さな清流は、それこそ都会にはない懐かしい風景を見ることが出来ました。

立川段丘の起伏の中から谷保天満宮の心字池に湧き出る湧水などを水源とした清流を利用した用水には小魚が泳ぎまわり、池状のところではおたまじゃくしが泳ぐなどが見られました。

城山公園は、中世の屋敷跡を整備したものです。武蔵野の面影を残した心休まる風景がありました。

この城山公園の脇に、移設復元された古民家がありました。とても落ち着く雰囲気を出しており、心が洗われた気分になりました。

ハケ下の小径を散策しながら、青柳段丘の谷保崖線から湧き出ている「ママ下湧水郡」にむかいました。「ママ下湧水郡」は東京都の名水 100 選にも選ばれており、呑んでもとても柔らかなおいしい水でした。そしてこのきれいで小さな流れは小魚だけでなく、子供たちの遊ぶ姿も見ることが出来ました。

「くにたち郷土文化館」で休憩を取りました。この建物は外から見るととても変わったものでした。しかしそれは多摩川に育まれた段丘、ここは青柳段丘の上に建っており、周囲の環境に配慮したものだそうです。そのため常設の展示室は地下にあるというユニークなものでした。

南養寺では、しだれ桜を楽しみにしていましたが、この所の寒さで残念ながらその美しい姿を見ることは出来ませんでした。お花見は今回のウオークの目的の一つのありましたが、天候には勝てず残念でした。

矢川には、甲州街道（国道 20 号線）から上流に向けて散策をしました。

府中崖線の湧き水を集めた矢川は、小さな流れながら人とのかかわりを持ってきました。家々に洗い場、人々の憩いの場、子供たちの遊び場、昆虫・魚・鴨などの姿を間近に見られるところなどを提供しています。小学校のそばの流れでは、ホタルの生息場所を作り保全しながら自然環境の保護の取り組みも行われています。湿地帯を利用した矢川緑地保全地域の整備も行われるなど取り組みも進められています。

その一方で大きな木が何本も切られ、宅地造成が進められる都市化の姿も見せています。

今回のウォークは武蔵野の面影を色濃く残し、私たちに懐かしさとほのぼのとした気持ちにさせるものでした。しかし私たちの呑川は都市化により、水源のほとんどは人工の下水等の再処理水になり、ごくわずかな自然湧水という現状では、今回見た風景は望むべくもありません。

ただ今後呑川を親しめる川、愛される川を目指した取り組みがますます重要な課題となっていると思われました。

消えた千束用水(雑感)

吉田銀夫

4 月のお花見ウォークに参加し、矢川の緑地を探訪した折にめぐり合った、春の小川のせせらぎとメダカのパレードの景色を見て、61 年前の千束用水の思い出が鮮明に蘇りました。その頃（昭和 19 年）には、近世の千束郷に広がる田畑を呑川と共にうるおしていたという灌漑の役割をとっくに終わり、細いながらも清流として荏原台の山裾を流れていました。メダカのパレードを追いかけ、宿題も忘れてたわむれていた追想のワンシーンです。当時は戦争中で遠くへ遊びに行くことは止められていたので、一回限りの思い出となりました。

それはさておき、あの用水が子安八幡神社下の緑道になっていることを「呑川は流れる・２００４」で知り、先日現地に行きました。東海道新幹線の土手の下から荏原台の山裾を巡り第二京浜国道に達する平坦な約１㎞の道路でした。３ｍ幅の煉瓦敷の桜の並木道と一段低く６ｍ幅のアスファルト舗装の車道が続いています。

用水は平成５～７年に掛けて暗渠化され緑道を広く確保出来ましたが、緑はまだ若木の

桜だけで草花はなく、また史跡の標識もない無味乾燥な場面の連続です。

「臭い物に蓋」の処置で一件落着とすることなく史跡として整備し、「いこいのある散策路」として活用できるようにするのが先人に対する後人の努めであると思います。

川　崎　の　川　随　想

折戸　清

川崎へ引っ越す

住み馴れた蒲田から川崎の幸区へ引っ越して５年が経過した。

昭和 24 年に目黒から蒲田へ引っ越して来たとき蒲田は東京のはずれだと思ったが、近所の人達は川崎のことを「川向こう」と言っていた。多摩川の向こうは田舎ということらしい。川崎へ引っ越して初めて最寄駅である南武線の矢向駅に降り立ったとき、昭和 30 年代の蒲田駅西口の雰囲気にそっくりだった。地形的には蒲田も川崎も多摩川の氾らん原の上にできた町だし、気さくな下町風の雰囲気も気に入った。

家の近所には六郷用水と兄弟の二ヶ領用水が流れている。蒲田の六郷用水は開発のため往時の面影はほとんどないが、川崎は田舎だったおかげで往時の面影があちこちに残っている。林芙美子の「めし」を読むと、矢向駅前に以前は二ヶ領用水の支流だったどぶ川が流れていたそうだが、蒲田の家のそばにあったどぶ川も昔は六郷用水の支流だった。少し足を伸ばせばかつて水泳を覚えた多摩川や水量が豊かな鶴見川にも近いので、呑川沿いに住んでいて水の流れに親しんだ私にはうれしかった。

水泳は多摩川で覚えた

私は中学生や高校生だった昭和３０年以前に水泳を多摩川で覚えた。当時大森海岸にも海水浴場があったが、多摩川は水がとてもきれいだったので弟とよく泳ぎに行った。蒲田から目蒲線の乗って沼部で降り、丸子橋を渡って川崎側の川の家へ着物を預けて泳いだ。

大田区側にも川の家があったが、急に深くなっている上、すぐ上流であまりきれいとは思えない丸子川（六郷用水）が注いでいたので、遠浅で水もきれいな川崎側で泳いだ。丸子橋の少し上流には水道用の取水堰があり、そこからきれいな水が流れ落ちていた。堰の上流はプールのようになっていてそこで泳ぎたかったが、水泳禁止の看板が立っていた。

その後高度成長期になると、あのきれいだった多摩川の水も家庭から流れ込む生活排水ですっかり汚れ、テレビで洗剤の泡だらけになった映像を見てショックを受けた。またカシベック病発生の恐れがあるとして、水道用水の取水も中止された。最近は下水道が完備したので水がきれいになり鮎まで戻って来たようだが、多摩川の水の 7 割位は下水処理水だそうで、まだ泳ぐ気にはなれない。今の子供は近くに川があっても泳げないのでかわいそうだ。

多摩川沿いの昔の様子

南武線の平間に親友が居たこともあり、昭和 31 年の 1 年間蒲田から川崎乗換で南武線の谷保まで通学したことがある。南武線の生い立ちは多摩川の砂利を運搬するために敷設された。南武線は川崎から府中本町まで多摩川沿いに走っているので、当時の多摩川沿いの風景を思い出す。当時の車輌は山手線のお古で、3 つドアのこげ茶色をした 3 輌連結だった。昼間の立川行は 30 分毎で、武蔵溝の口から先は単線だった。武蔵小杉までは家並みの間を走っているが、小杉を過ぎると一面に田んぼが広がっていたのを思い出す。田んぼの灌漑用水は登戸付近の 2 箇所で多摩川から取水した二ヶ領用水の水だ。川崎市が南北に細長いのはこの用水の灌漑地域と関係がある。溝の口から先は府中の手前で多摩川の鉄橋を渡るまで田んぼと梨畑が一面に広がっていた。多摩川の鉄橋を渡り台地を走るようになると、付近は麦畑と桑畑に変わる。京浜東北線で蒲田を出て多摩川の鉄橋を渡ると、川崎側で明治製糖の荷役クレーンが川へ突き出ていた。トラックが普及するまで多摩川は物資の運搬に盛んに利用された。初期の川崎の大工場はすべて多摩川沿いにある。

多摩川のサイクリング

昭和 35 年に茨城県の日立市に転勤になり、ボーイスカウトのリーダーとして近所の久慈川沿いのサイクリングコースへ少年達をよく連れて行った。久慈川は流域に都市がないせいか水がとてもきれいで、海に注ぐ少し手前で日立市は水道水の取水をしていた。昭和 52 年に東京にまた転勤となり、ボーイスカウト活動で使用していた 10 段変則のサイクリング車で多摩川沿いのサイクリングコースへよく出掛けた。川崎側のサイクリングコースは多摩川大橋から登戸の先の稲田堤まで整備されていた。春には宿河原付近の二ヶ領用水沿いの桜並木へ立ち寄り花見をし、秋には稲田堤付近の梨園に立ち寄り梨狩りをした。梨

は川崎生れの「長十郎」という赤皮の甘味の強い大きな梨である。蒲田は川崎に近いせいか以前は長十郎梨が多く、食べ盛りの頃は実が大きいので好きだった。

水量豊かな鶴見川

鶴見川は綱島付近まで感潮域なので、現在住んでいる幸区辺りは水量がとても豊かである。そのためこの付近の田んぼは海水が混じる鶴見川から灌漑用水を引くことができず、二ヶ領用水の水を使用したそうだ。しかし米や煉瓦また肥料にする屎尿の運搬には盛んに利用されたようだ。この川の下流は水量豊かな大きな川で開放感があり、また直線でなくゆるくカーブしており、いかにも川らしい。
両岸は車の通らない大きな遊歩道になっており、どうしてこの川がいつも汚いワースト３に入るのか不思議な位である。この川は総合治水対策が比較的うまく進んでいるので、都市河川の研究対象としても興味がある。

水のこころを誰に語らむ

川崎の市民は多摩川を「母なる川」と言っている。昔は時には洪水で悩まされ、流路が変わることもあった。川崎市に「等々力」・「沼部」・「丸子」など東京都と同じ地名があるのはそれを物語る。しかし多摩川は川崎市の登戸付近から河口までの田畑をうるおし、また農産物から工業製品までの物資の運搬もして多くの恵みを川崎に与えてきた。川崎の詩人である岡本かの子は多摩川についてこのように歌っている。

多摩川の清く冷たくやはらかき
　　水のこころを誰に語らむ　　（平成 17 年 4 月 1 日記）

「呑川は流れる・2004」の図書館での貸出し状況

大田図書館にお願いして、「呑川は流れる・2004」の図書館別貸出し回数を調べてもらいました。当初から 4 月 26 日までの実績は多い順につぎのとおりです。

久が原図書館	11 回	大森東図書館	4 回
洗足池図書館	11 回	大森南図書館	3 回
大田図書館	9 回	入新井図書館	3 回
蒲田図書館	9 回	下丸子図書館	3 回
大森西図書館	7 回	多摩川図書館	3 回
池上図書館	6 回	馬込図書館	2 回
蒲田駅前図書館	6 回	羽田図書館	2 回
浜竹図書館	6 回	六郷図書館	0回
文化の森情報館	5回	合　計	90 回

全体で 90 回も貸出されていることは予想以上でした。

編集後記　今号は新たに二人の方が原稿を書いて下さいました。大勢の会員の投稿をお待ちしています。　(福井　甫)